

《研究ノート》

わが國主要貿易港發展形態の研究

——四日市港を中心とした分析——

松浦茂治

一 主要貿易港發展形態の概観

わが國における幕末開港以降における主要貿易港の發展を概観して、次のような四期に時代區分を行うことができる(圖1)。第I期は、開國——明治三三(一八九九)年の間である。安政六(一八五九)年六月、その前年に締結された「安政の五箇國條約」に基づいて、まず横濱・長崎・函館の三港が、八ヶ年後の慶應三(一八九九)年一月神戸が、その翌年明治一(一八六八)年一月新潟が、さらに四年を経た明治五(一八七二)年七月大阪が開港され、この期は以上六つの港を通じて貿易が行われたのであるが、そこに見られる特徴は輸出入とも横濱・神戸兩港への過度の集中である。すなわちこの期を通じて實に、わが國貿易額の八五%がこの二港を經由して行われた(以下本稿では貿易額は輸出入合計額の意味で使用し、%は前後の關係で明瞭の場合は省略す)。しかしこの期間内においても、明治二二年を契機として一つの變化が起つた。すなわちこ

の頃までは二港のうちでも横濱が斷然優位に立つ(例えば明治六年の貿易額は兩港で八八・二、このうち横濱だけで七二・二)。ところが明治二二年になると神戸貿易額の伸長が著しく(この年兩港で九一・七、このうち横濱五九・〇、神戸三二・九)、その後この間隔はぐんぐん狭まり、明治三一年に至り遂に神戸は横濱を超越しようになる(この年兩港で八七・九、このうち横濱四三・二、神戸四四・七)。なお開港當時政治的配慮によつて決定された六港のうち他の四港は長崎を除いては貿易額も僅少で、わが國開港としての機能を十分果していない。徳川時代よりの古い傳統を持つ長崎のみは、明治六年において八・一の比率を占めるが、以後その地位は低落し明治三二年において四・〇に止まる。他の多少の見るべきものとして北海の門戶函館があるが、同三二年において〇・八を保つに過ぎない。

第II期は明治三三(一九〇〇)年より昭和九(一九三四)年までの期間で、前年の三二年に日清戦争後のわが國生産力の發展に始發されて、一舉に一八港が開港され合計二四開港を持つに至り、開港数は四倍に膨脹したのである(明治二七年の日清戦争を契機としてわが國貿易額の大膨脹がみられる)。この一八港中に四日市が含まれ、近接した武豊・清水兩港と共に中京工業地帯の門戶となる。名古屋は遅れて八年後の明治四〇年人造港建築第一期工事の進捗を待つて開港される。なお北九州では門司が前述の三二年の一八開港中に含まれ、若松が五年遅れて明治三七年に開港される。この期は日露戦争、第一次大戦と二度の戦争を含んだ三四ヶ年で、期末の昭和九年には大阪が一

別貿易額

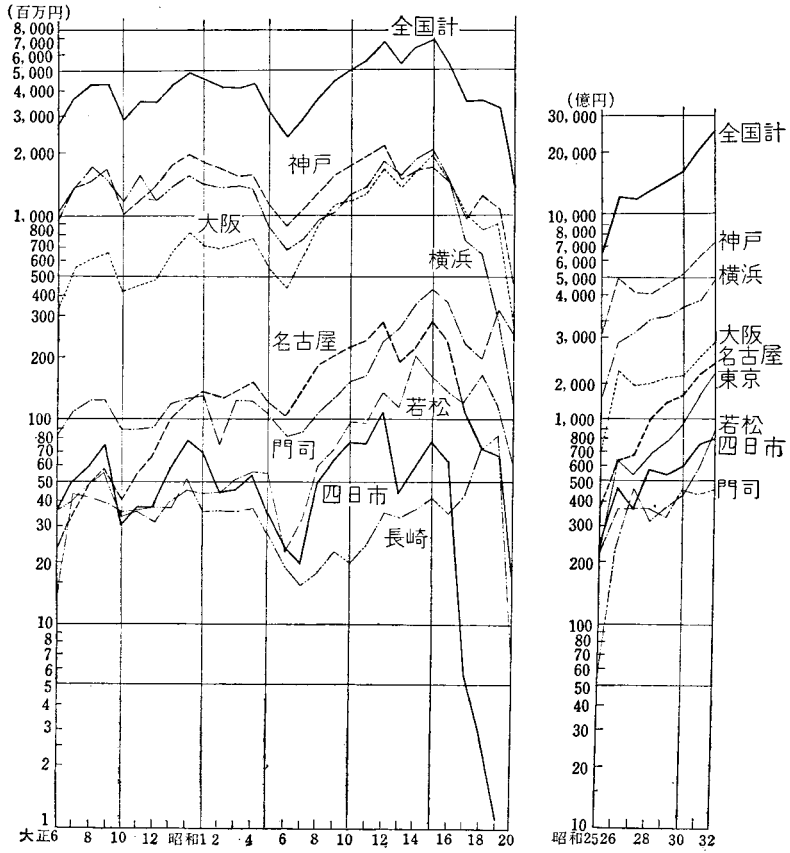
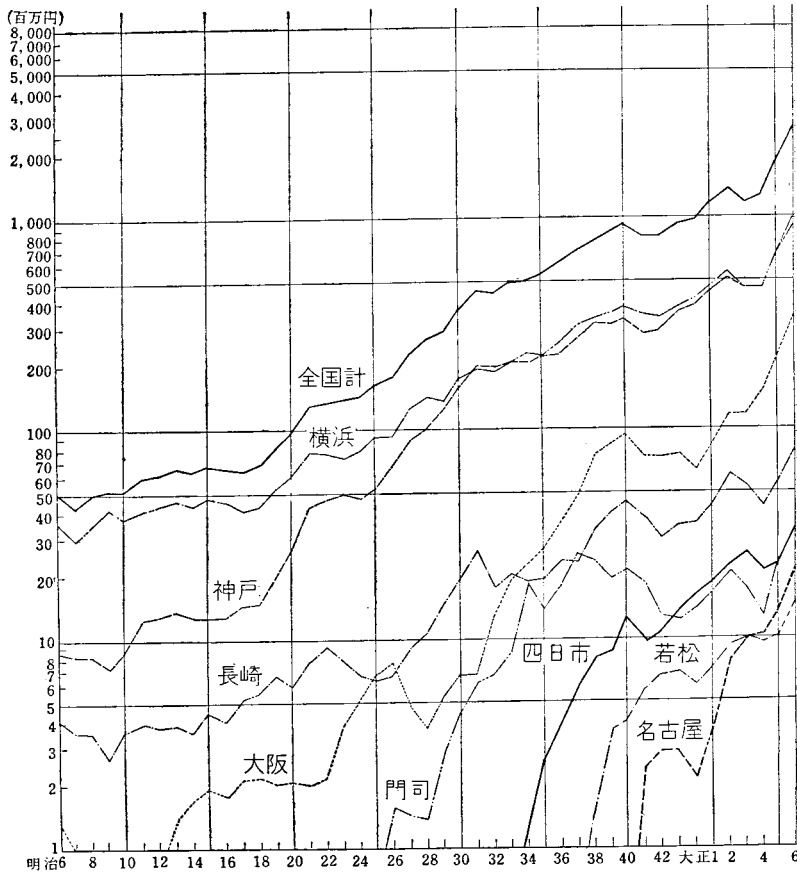


圖 1 主要港



資料：大蔵省 日本外國貿易年表

注 1. 全国計は昭和 20 年終戦までは内地と樺太の合計額、以降は日本國の合計額。

注 2. 門司は明治 23 年 11 月より石炭他四品目の特別輸出港に指定され、同 32 年より一般開港となる。

注 3. 門司は昭和 15 年以降下關を併合して關門港となる。

時的ではあるが横濱を超越し神戸に次いで第二位となる。またこの期における名古屋の躍進ぶりには目覚ましいものがある。この期を通じて横濱と神戸の貿易額は伯仲するが、前半では京濱工業地帯を背後地を持つ横濱が、後半特に大正一二年以降は阪神工業地帯を背後地を持つ神戸が第一位を占める。期末の昭和九年における貿易額主要港別構成比は表1の通りで、阪神兩港で六〇・四、これに横濱を加えた三港合計では八三・五となる。

表1 昭和9年 十大港貿易額構成比 (%)

貿易額	輸出額	輸入額	貿易額
神戸	36.4	34.7	35.5
大阪	27.0	22.9	24.9
横濱	22.6	23.9	23.1
名古屋	5.3	3.9	4.6
門司	2.4	3.2	2.8
若松	1.1	2.1	1.6
四日市	0.3	2.5	1.4
函館	1.2	0.7	0.9
清水	0.6	0.7	0.7
長崎	0.3	0.7	0.5
その他	2.8	5.1	4.0

またこの期間中に長崎は大阪、門司、四日市、名古屋に次々と追越され、

これら諸港のうちもっとも遅れて發足した名古屋は、その後若松、四日市、門司を超越して發展していく。この期の特徴は阪神兩港の伸長、北九州の門司・若松および中京の名古屋・四日市の躍進であり、また横濱・神戸以外に大阪・門司・若松・名古屋・四日市等が頭角を現わし、貿易門戸の少數港への集中が緩和され、その分散——遠心的傾向がきざし始めたことである。

第三期は昭和一〇(一九三五)——二〇(一九四五)年の第二次大戦を含む期間で、わが國貿易額は昭和二年および開戦前年の昭和一五年の二回のピークを持ち空前の膨脹を示す。この期には國防的見地から政策による工場の分散が行われ、貿易港もこれに呼應して分散的傾向を一層強化していく。昭和一二年の貿易額についてみるに、神戸(三五・五)、横濱(二三・一)兩港で五八・六、これに大阪(二四・九)を加えた三港合計で八二・九となり、名古屋(四・三)、門司(三・五)、若松(二・〇)四日市(一・六)などがこれに續く。この期の特徴は第二期のその強化である。すなわち門司・若松兩港の躍進ぶりは顯著で、名古屋・四日市を凌ぐものがある。また神戸・横濱・大阪三港の貿易額は著しく接近し、三港鼎立の形勢となる。

第四期は終戦——昭和三二(一九五七)の期間で、この期の特徴は大阪が第三位を維持しながらもそのウエイトを減じて第四位名古屋の急ピッチな追跡を受けていること、最も新しく登場した東京(昭和一六年五月開港)が急速な成長を遂げていること、門司・若松兩港が名古屋・四日市兩港に遅れをとるに至ったこと、最近において若松のカム・バックが目覚ましいことである。期末の昭和三二年の貿易額は神戸(二九・一)、横濱(一八・九)兩港にやや集中するが、これに次ぐものとして大阪(九・六)、名古屋(七・四)、東京(六・七)、若松(三・六)、四日市(三・一)、門司(一・八)等がある。すなわち貿易の分散的傾向はさらに一層打出されてきたのである。

以上四期に區分してみたような各主要港別貿易發展形態をも

たらしめた原因については、各港別の詳細な分析を要するが、各港背後地の産業構造の變動・貿易發展に對する施策、仕向市場たる世界經濟の變動等が重要なファクターとなる。以下その大要のみを概観する。第I期における横濱は生絲輸出に、神戸は綿花輸入に、その優位を支えられている。第II期の大阪の躍進はわが國綿織物輸出の大半を獨占し、この綿織物輸出がわが國總輸出額中で大きな比重を占めるようになったことが一つの原因である（大正一四年わが國總輸出額中綿織物は一八・八内大阪六四・六、同年わが國總輸入額中綿三・五・九内神戸六四・四大阪一・二・九）。期末の昭和九年における主要輸出入品の港別構成比をみれば表2のようになる。第III期における門司・若松兩港の躍進は一般的にいえば北九州の工業化に對應するものである。これを昭和一三年についてみるに門司では精糖（わが國總輸出額の一八・〇）・機械油（同五・二・一）苛性ソーダ（同四七・〇）・小麥粉・麥酒等の輸出と、小麥（わが國總輸入額の一〇・九）・食鹽（同四二・七）・機械類等の輸入が増加し、若松については精糖（わが國總輸出額の一〇・五）・金屬（同一〇・四）等の輸出と、鑛及び金屬（わが國總輸入額の一〇・九）・石炭（同二六・〇）・大豆（同一〇・五）・食鹽（同二〇・三）等の輸入が増加している。第IV期における名古屋・四日市兩港の伸長は綿花・羊毛の兩港よりの輸入比率増加（昭和三二年兩港の綿花輸入額計はわが國綿花總輸入額の三四・二、同羊毛七四・六）と、名古屋の機械類・自動車輸出、四日市の酸化チタン輸出の増加等に基因する。またこの期における東京の進出は輸出における

表 2 昭和9年主要輸出入品港別構成比 (%)

主要輸出品	對わが國總輸出額比	各商品港別輸出額構成比
綿織物	22.7	大阪54.3, 神戸34.2, 名古屋9.0, 横濱1.5 その他1.0,
生絲	13.2	横濱71.4, 神戸38.6
絹織物	3.6	神戸60.9, 横濱36.6, 大阪3.4
主要輸入品	對わが國總輸入額比	各商品港別輸入額構成比
線綿	32.0	神戸59.7, 大阪28.5, 横濱6.6, 四日市2.2, 名古屋0.2, その他2.8
羊毛	8.2	横濱23.5, 大阪21.5, 名古屋21.2, 四日市 17.5, 神戸16.3
大豆	1.8	横濱20.4, 神戸18.9, 武豊4.2, 名古屋3.8, 四日市1.6, 大阪1.6, その他49.5

玩具（昭和三二年東京總輸出額の一・二・七）鯨油（同一〇・五）電気機器・船舶等と、輸入における鐵鋼くず（昭和三二年東京總輸入額の一四・五）・粗糖（同一三・九）・卑金屬（一一・九）・鐵鋼（一一・一）・生ゴム・木材等の急増による。
 (1) 第IV期については、終戦後の統計慣習に従い線綿と實綿とを合計して綿花とし、羊毛には紡毛

絲原料用の毛絲くず等も含む。

二 四日市港貿易發展形態の分析

四日市港の貿易は、前述の第Ⅱ期直前より開始される。まず輸出についてみれば、大正八、九年頃を境にして前半は綿織物・綿織糸が同港輸出額の過半を占め、後半は陶磁器がこれにとつて代わる。輸出額のグラフを畫けば、この主要輸出品轉換期を谷間にして前後二つの山が明らかに示される。しかし第一次大戰を契機とするわが國一般的輸出伸長（ほぼ大正四―昭和四年）の動向からみれば四日市のそれは緩慢であり、同港のこの期における貿易額の發展はもっぱら後述する繰綿輸入の増加によつてゐる。この期の末に陶磁器輸出が減退し昭和九年において植物油に首位を讓る（同年植物油のわが國總輸出額中に占める比率は〇・五、その輸出港別構成比は神戸四六・一、大阪一七・八、四日市一五・八、横濱七・〇、その他一三・三）。この年における四日市港輸出額商品別構成比は植物油二七・三、陶磁器二七・二、綿織物五・四、セルロイド製品三・六、その他三六・五となつてゐる。この期の前半の初期明治三五―三八年頃は地元産の陶磁器、綠茶等が輸出額の首位を占めるが、わが國總輸出額中において同港輸出額の占める比率は小さい（明治三七年〇・四）。明治三九年より前述のように綿織物・綿織糸が輸出品中のトップをきるようになり、第一の山を迎える。この頃の典型的な年として大正一（一九一三）年をとり、同港輸出額商品別構成比をみると綿織物六一・七、綿織糸一四・四、綠茶九・七、陶

磁器三・三、その他一〇・九となる（同年においてわが國綿織物輸出額がわが國總輸出額中に占める比率は四・九、この綿織物輸出の港別構成比は大阪五四・一、神戸二五・九、四日市九・一、横濱五・六、名古屋三・一、門司一・〇、その他一・二）。次いで大正八、九年の谷間を経て陶磁器輸出を主とする後半期である第二の山に移行する。谷間の時期は一時的に綠茶が輸出品中のトップに立つが（大正八年同港輸出額商品別構成比は綠茶三八・〇、陶磁器一六・五、箱樽板一五・〇、綿織物三・七、その他二六・八、綠茶總輸出額がわが國總輸出額中に占める比率〇・八、この綠茶の主要輸出港別構成比は清水七八・二、横濱一一・七、四日市八・一、その他二・一）、綠茶輸出はその後清水に集中し、同港から九〇・〇前後が輸出されるようになる。この時期の特徴である陶磁器輸出の最も伸びた昭和四年についてみると、陶磁器は總輸出額中の八一・四で、これに次いで綿メリヤス肌衣四・三、琺瑯鐵器二・五、箱樽板一・九、米一・九、その他八・一となる（同年において陶磁器總輸出額が、わが國總輸出額中で占める比率は一・七、その輸出港別構成比は名古屋五五・〇、四日市二八・〇、神戸一一・四、門司二・四、大阪二・二、その他一・〇）。この第Ⅱ期の輸入については、ほぼ繰綿が壓倒的地位を占め續ける。ただ初期の明治三九年までは大豆糟の輸入が多く、内地米不作による明治三七、三八年の米輸入膨張時（米總輸入額がわが國總輸入額中に占める比率は明治三七年一六・一、翌三八年一〇・九）を除いては、繰綿輸入港としての特徴が繼續される。すなわち同港の開港は大豆糟・大豆の輸入によつて

開始されるが、明治三五年より繰綿の輸入が始まり（同年同港の總輸入額中の四・四）、その後漸増を續け、大正六年において同港總輸入額中の九八・〇を占めるに至る（繰綿に次いで大豆一・三、その他〇・七）。この年の繰綿總輸入額のうちが國總輸入額中に占める比率は三一・九、その輸入港別構成比は神戸六五・三、横濱一一・五、大阪九・二、四日市八・三、門司四・五、長崎一・一、その他〇・一である。しかしこの期の末昭和八年において羊毛が繰綿を抑えて第一位となり（同港總輸入額商品別構成比は羊毛五七・一、繰綿二四・七、採油用種子七・二、米三・二、その他七・八、また羊毛總輸入額のうちが國總輸入額中に占める比率は八・六、この羊毛總輸入額の港別構成比は横濱二四・一、大阪一七・九、神戸一七・三、四日市八・六、その他二九・六）、次の第Ⅲ期へと移行する。なお、この期に羊毛輸入が始まった頃の情勢についてみると、大正二年に半製品である毛織糸が少量輸入されておるが、羊毛輸入は昭和一年になって開始される（この年同港總輸入額中の一・三を占め、羊毛總輸入額の港別構成比は神戸四七・九、横濱二〇・四、大阪一八・九、四日市〇・九）。同港の羊毛輸入はその後絶對額においても商品別構成比率においても漸増を續けて、前記昭和八年に至る。なお繰綿・羊毛輸入の増加は四日市市およびその近傍における近代の綿・羊毛工業の發達と對應するものであり、また同港の六次州別輸入市場の百分比の變化（羊毛輸入について言えば、オセアニア州は昭和六年の〇から昭和七年の二六・六、翌八年の五五・二……と比率が急増）にも呼應する。

第Ⅲ期に入り、まず輸出についてみれば、前期に續いてしばらくは植物油が優位にあるが、昭和一二年より陶磁器が回復して首位にたち、またそれまで同港總輸入額中一・〇前後で少額しか輸出されていなかった漁網が躍進して第二位となる。この期（第三の山）のピーク昭和一二年についてみると、同港總輸出商品別構成比は陶磁器四二・九、漁網二二・九、珪瑯鐵器六一、植物油五・三、その他二四・一となる。この陶磁器總輸出額のうちが國總輸出額中に占める比率は一・七、またその港別構成比は名古屋七八・〇、四日市一一・一、門司二・七、大阪二・四、その他五・八である。一方この期の輸入についてみれば、前期末に確立した羊毛、繰綿、採油用種子の順位はそのまま當分の間繼續するが、昭和一五年以降第三位は玉蜀黍がとって代わるようになる。輸出の場合と同じ昭和一二年についてみれば、同港總輸入額商品別構成比は羊毛七八・五、繰綿二一・四、採油用種子四・七、玉蜀黍二・一、その他三・三となる。この羊毛總輸入額のうちが國總輸入額中に占める比率は七・九、その港別構成比は横濱二四・五、名古屋二四・三、四日市二・八、大阪一五・三、神戸一四・一となる。第二次大戦前（昭和一二—一五年）のわが國一般的貿易膨脹期において四日市もほぼ同傾向を示すが輸出は矢張り比較的に弱く、輸入増大に多くを依存し、名古屋・大阪等の成長率には及ばない。

第Ⅳ期に入り、まず輸出面では始めのうちは肥料・硝子などが少量出ているに過ぎない。民間貿易再開後の昭和二五年以降も當初は珪瑯鐵器、化學肥料（硫酸・過磷酸石灰）、ミシン及

指數(昭和25年=100)

阪 神 工 業 地 帯				北 九 州 工 業 地 帯			
大阪(9.6)		神戸(29.1)		門 司(1.8)		若 松(3.6)	
輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸 入
(9.0)	(9.9)	(41.1)	(21.1)	(1.3)	(2.1)	(1.5)	(5.0)
202.0	413.1	259.3	224.6	310.6	133.2	525.9	2,092.0

欄の()内の数字は、その港の輸出額または輸入額の方が國總輸出額ま

び同部分品などが主要輸出品で、陶磁器も昭和二八年に一度首位を占めるが(同港總輸出額の三八・二)、それほど大きな比重を占め得ない。この期の輸出において注目すべきは、昭和二九年より始った酸化チタンが(同年は同港總輸出額の一・九・四)、翌三〇年以降も引續き第一位を占め次第に大きな比重を持つようになり、これがこの港の輸出成長率を大きくしている事である。昭和三二年の同港總輸出額商品別構成比は酸化チタン四九・一、陶磁器一五・三、硫安九・七、漁網七・二、板ガラス四・六、過燐酸石灰四・一その他一〇・〇となる。なおこの酸化チタン總輸出額の方が國總輸出額中に占める比率は〇・二、同港はこの七三・一を輸出している。第二位の陶磁器總輸出額の方が國總輸出額中に占める比率は一・八、その輸出港別構成比は名古屋九三・七、四日市三・一、その他三・二となっている。この期の輸入は、まず綿花輸入によって開始され

るが、昭和三三年に至って羊毛がこれを追越し、以後引續き首位を占め續ける。輸出の場合と同じ昭和三二年について同港總輸入額商品別構成比をみるに羊毛五六・一、綿花二二・〇、原油一〇・一、その他織物用纖維三・四、粗糖二・九、大豆一・六、その他三・九となる。このうち羊毛總輸入額の方が國總輸入額中に占める比率六・二、その輸入港別構成比は四日市三八・四、名古屋二五・六、横濱一〇・二、神戸七・〇、大阪四・七、その他一四・一で、四日市は羊毛輸入についてはわが國第一位、ダンケルク、ゼノア、ハルと並んで世界の四大羊毛輸入港と言われるようになった。第二位の綿花の同じくわが國總輸入額中に占める比率は一〇・五、その輸入港別構成比は神戸四六・三、名古屋三三・六、大阪一五・九、四日市一〇・四、その他三・八となる。第三位の原油輸入は昭和二六年に始まり、そのわが國原油總輸入額中に占める比率は一・〇、その後この比率は年毎に増大し二七年四・四、二八年四・九、二九年五・〇、三〇年七・四、三一年七・九、三二年六・六と漸増的に推移している。なおこの期の主要港別貿易實額は圖1の通りであるが、輸出および輸入のそれぞれについてその成長率を計算してみると表3のようになる。これによってみるに輸出の成長率では四日市が第一位で若松、東京、名古屋と續き、輸入のそれでは若松が第一位で東京、名古屋、横濱と續く。四日市は輸出では酸化チタンという新商品の登場により成長率の高い未成熟の段階にあるが、輸入については原油がこれまでのところでは未だ比較的小さな比重しか占めず、古くからの羊毛・綿花輸入港として相當大きな比率を示

表 3

昭和 32 年主要港輸出入額

わが國總計 (100.0)		中京工業地帯				京濱工業地帯			
		四日市(3.1)		名古屋(7.4)		東京(6.7)		横濱(18.9)	
輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入
(100.0)	(100.0)	(0.4)	(4.9)	(6.9)	(7.8)	(5.1)	(7.8)	(19.7)	(18.4)
293.9	402.4	1,077.4	277.3	307.8	516.4	441.1	1,173.9	261.5	403.9

注 1 各賞額を大蔵省税關部調らへ輸出入各單價指數によりデフレートしたものにより計算した。

注 2 各港名右の()内の數字は、その港の貿易額のおが國總貿易額に對する百分比を、また輸出または輸入たは總輸入額に對する百分比を示す。

すがその成長速度はそれほど大きなものではなく、これら二商品に關する限りすでに成熟段階に到達したのと言えらる。

(1) 明治三五年一二月、尾勢地方各綿紡績會社と三井物産との協定により、上海より繰綿および綿實の直輸入を行うことになり、その第一船が入港。大正二年三月、インド綿の直輸入を行うことになり、大阪商船ボンベイ航路船の第一船が繰綿を積んで入港。大正五年一〇月、ボンベイよりの繰綿輸入船の積荷からベストが四日市市内に發生し、同年および翌六年はインドよりの

繰綿輸入船寄港は激減したが、同港の繰綿輸入實額は減少してない。

(2) 昭和七年一〇月、東洋毛絲紡績鹽濱工場(市内)設立を機に、四日市市および同市商工會議所の豪毛直輸入運動を奏し、大阪商船濠州定期航路船の寄港決定し、その第一船が羊毛を積んで入港。

(3) 拙稿 四日市港の研究 愛知學大研究報告 第8輯 昭和三四年 一一〇頁 第3表 四日市市及び三重縣内近代綿工業の發達、第4表 四日市市及び三重縣内近代羊毛工業の發達

(4) 拙稿 中部經濟圏の貿易にみられる變動と成長 愛知學大研究報告 第9輯 昭和三五年 四四九頁 第12圖 四日市港州別輸入額の百分比

(5) わが國における漁網の主要輸出港は大きく變動してきた。いま昭和六年以降の、わが國漁網總輸出額主要港別構成比をみるに同年函館四三・四、敦賀四三・二、昭和七年函館六〇・五、昭和八年函館五〇・七、昭和九年名古屋四四・二、昭和一〇年名古屋三六・二、函館二八・七、昭和一一年名古屋五〇・二、昭和一二年四日市六五・〇、昭和一三年四日市五七・四、昭和一四年四日市六一・五となる。漁網はわが國總輸出額中で占める比重も小さいことであり(昭和一二・一〇・一)、年により一港または二港くらいに集中して一括輸出される傾向がある。

(6) 昭和三三年六月には、それまでの大協石油の他、昭和

四日市石油も操業を開始し、またこれら製油所を中心とする総合石油化学工業センターも整備されつつあるので、四日市の原油輸入は將來も増加する見込である。拙稿四日市港の研究 前掲 一三五頁 第10圖 四日市地區石油化学工業系統圖

三 結 語

(1)貿易港の發達をみるに、はじめは水深・灣入などの自然的條件によって開港時期・港勢等も左右されるがそれは決定的なものではなく、結局は背後地産業の發展が人造港を造築し、自らの海外への門戸を開拓していく。

(2)重要輸出品または輸入品は、一度その輸出港または輸入港を決定すると相當期はその港に固定する(前述の漁網輸出は特殊の例外である)。しかしこの場合にも(i)陶磁器の名古屋、緑茶の清水からの輸出のように、港に接近して原料も得られ生産も行われる場合、(ii)箱樽板・ベニヤ板の名古屋よりの輸出のように、はじめは近接地より得られる材料により近接地で生産して輸出されていたが、途中からは主として輸入原料に切替えて近接地で生産・輸出される場合(四日市も大正八—一〇年頃、近接地で得られる原料により箱樽板の輸出を相當額行つたが、殆んど原料材の輸入なく輸出も沈滞して行つた)、(iii)毛織物・綿織物の最近における神戸よりの輸出のように、近接地生産のものもあるが、他地域生産のものをも吸引し場合によってはある程度加工もして一括輸出する場合、(iv)生糸の横濱よりの輸出

のように最初輸出が行われた事により検査所等の諸施設が完備し引續き輸出が行われる場合、(v)線綿・羊毛の四日市よりの輸入のように近代工場の誘致、輸入のための定期航路船の寄港誘致、港内荷役において便宜提供等による場合、(vi)チタン鑽等輸入・酸化チタン輸出の四日市、鐵鑽・鐵鋼くず・石炭輸入・金屬輸出の若松のように臨海工場を有する場合などがある。

(3)四日市の原油輸入は前述のように現在増加の趨勢にあるが、その臨海工業地帯でこれを原料として合成ゴムの生産が行われ、また將來合成纖維の生産も行われるようになるならば、原油輸入は實質的には生ゴム輸入・羊毛輸入に代替することになる。

(4)ところでこのような港別貿易發展形態を分析することによって、「後進港あるいは新興港の貿易が先進港の貿易商品あるいは市場を攝取し、それを追跡しつつ成長發展する場合に一般的に成立する法則を導出することができるならば、それは赤松先生の「産業發展の雁行形態」と名づけてよいであろう。ここでは一港の貿易發展は、その商品構成と地域構成とを刻々に變えながら、他港のそれとのシーソー・ゲームとして把握される。また隣接港が同じような商品構造・市場構成を持つような發展段階に達し同質的・競争的關係に立つたときは、産業港整備計畫・能率的貿易發展計畫・工業の適正配置等のため何らかの調整が考えられねばなるまい(例えば四日市・名古屋兩港の關係)。すなわちこのような分析は嚴密には符合しな

いが、國際經濟社會内の各國民經濟について考えられた「産業發展の雁行形態」を、一國民經濟内の各地域經濟にも適用して考えていこうとするものである。

(1) 最近中京工業地帯で原料も輸入され生産も行われる綿織物・毛織物の多くが、神戸に吸引・輸出される理由について調査が行われ、名古屋よりの輸出が努力されているが、今日未だ必ずしも効果が上っていない(拙稿 中部經濟圏の貿易にみられる變動と成長 前掲 四三四—四三

七頁)。また四日市で生産される陶磁器の相當量が昭和八年頃より、同じように名古屋に吸引・輸出されているが、これは重量・容積大きく損傷し易い商品であるため、地元の努力で四日市輸出の割合が増加しつつある(拙稿 中部經濟圏の貿易にみられる變動と成長 前掲 四三八—四四〇頁)。

(愛知學藝大學助教)